

令和8年度 北部地区子ども支援net 議事録

日時：令和8年6月24日（金） 13:30 ～ 16:00

場所：りゅうがく館 講堂

参加者： 44 名



1. 開会あいさつ

龍郷町子ども子育て応援課

課長 加藤 寛之 氏

2. 説明（事務局）

奄美地区地域自立支援協議会

について



3. ミニ研修

「家庭と子ども～つながりを支える支援者の視点～」

鹿児島大大学院臨床心理研究科 准教授 高橋 佳代 氏



4. グループワーク

「奄美北部での困り感のある子どもや、その家族を支える人たちの連携について」

○保護者・家族へのアプローチと支援の難しさ

- ・意識のギャップ：支援や療育の必要性を伝えたい機関側と、受け入れやニーズが薄い保護者側との意識の差や伝える難しさが多く挙げられた。
- ・家庭支援の重要性：子ども本人だけでなく家族の支援が重要だが、家庭内の問題に踏み込む難しさや、島特有の地域的な抵抗感（親戚への配慮やサービス拒否）がある。
- ・アプローチの工夫：園や相談支援が間に入って早期に不安解決を図ることや、日常のコミュニケーションから信頼関係を築く重要性が共有された。

○地理的要因と支援資源（事業所・検査など）の不足

- ・資源の偏りと送迎課題：笠利方面に利用者が多いが、事業所が龍郷など遠方にあり送迎が負担。笠利町にも事業所や不登校の居場所を求める声がある。
- ・事業所の空き待ち：見学に行っても空き待ち状態であり、枠がないため複数事業所を併用せざるを得ないケースがある。
- ・発達検査の不足：検査を希望する保護者が増えているが、実施できる資源（場所）が不足している。

○機関連携と情報共有のギャップ

- ・学校と事業所間の情報共有：学校側が作成した個別の支援計画が福祉事業所（放課後等デイサービスなど）に共有されていないケースがあった。
- ・多職種連携の現状と課題：関係機関が一度に集まれる場（チーム）があると保護者・支援者双方にメリットが大きい。一方、先生不足や異動、時間の制約（忙しさ）による連携の難しさや、児童相談所との連携・状況把握の取りづらさも指摘された。

○年齢上昇に伴う支援の途切れ・不登校への不安

- ・中高生以降の支援の薄さ：年齢が上がるにつれてつながれる支援機関が減る。中学生になり放デイに行かなくなるなど、支援が途切れることへの不安が強い。
- ・不登校・ひきこもり支援：若年層の不登校の相談先が不足している。子どもの気持ちに寄り添った居場所づくりや、家庭・学校・地域が連携したサポートが必要とされている。

○現場での工夫・支援ツールや制度の活用

- ・引き継ぎツールの活用：学校への引き継ぎの際、「移行支援シート」や「リレーファイル」などのツールは全スタッフで対応を共有するために非常に有効。ただし、その存在や必要性を担当者自身がさらに認知していく必要がある。
- ・新しい制度への期待：2026年度から導入される「5歳児健診」により、就学前の早い段階からことばの教室や児童発達支援につながるケースに期待が集まっている。
- ・現場の環境調整：落ち着きのない子どものために、リズム体操を取り入れたり、室内の壁面掲示を減らしたりするなどの環境調整の工夫が共有された。

